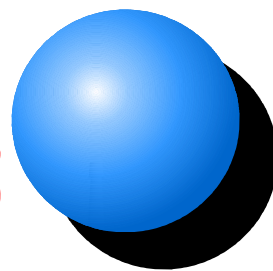




ゆい・まーる



★VOL 19 令和3年12月7日



絵本の楽しさをあそび分け

■「マスクをとったら」

いりやまさとし／作

今の状況を反映させた作品。マスクをしたいろいろな動物に〈マスクをとったら何したい?〉

と問いかけると、ライオンは「がーってさけびたい!」、カバは「ふー! おもいきり あくびしたい」と答えます。●読んでもらう子どもたちはきっと〈そうだそうだ!〉と感ずることでしょう。●最後のページに登場する子どもたちの言葉は、まさにその通り! ●2才くらいから。



りとりり末、さっちゃんは〈名前って何?〉にたどり着きます。さっちゃんはどうな気持ちで、ねこの名前をつけるのでしょうか? 最後のページの文で幸せな気持ちになります。●15年以上前の作品ですが、〈自分って何?〉を考える力になります。●4才くらいからお父さん・お母さんにも。

■「せんろはつづくにほんいつしゅう」

鈴木まもる／作

シリーズ4作目。3作目までは、絵本の中の子どもたちが線路をつなげていく



のを読んでもらう子どもたちも一緒に楽しめる作りでしたが、この作品ではがらりと変えています。●日本は広く、線路でつながっていて、駅で乗り換えればいろいろな地方に行け、日本一周ができることを教えてくれます。●沖縄を除いて日本を8つに分け、それぞれの地方で走っている列車や乗り換える駅が見開きページの地図で描かれ、乗り物絵本が好きな子にオススメです。少しマニアックな作品ですが、線路を通して日本各地に目を向けるきっかけになるかも。●シリーズには、「せんろはつづく」「せんろはつづく まだつづく」「せんろはつづく どこまでつづく」があります。●3才くらいから。

■「ねこのなまえ」

いとうひろし／作

名前は誰かが願いをこめてつける、そしてそのことを自分が知っていることが大切なこと…4~5才の子ども



にも伝わる作品。●春の暖かな日、さっちゃんが散歩に出かけるとノラねこから名前をつけて欲しいとお願いされます。ねこには生まれたときから名前がありません。さっちゃんは、名前がないってどういうことだろうと考えます…さっちゃんとねこのや

■「つきのばんにん」

ゾシエンカ／文 あべ弘士／訳

まんまるのお月さまが小さくなったり、大きくなったり…子どもにとっての不思議を〈月の番人〉になったシロクマのエミールを通して描いています。●光り輝く月の美しさと月に照らされた夜の街の彩りがやわらかなタッチの色づかいで描かれ、どのページもステキ、うっとりです。●月の番人になったエミールの張り切りと頑張り、不安が、あべ弘士さんの訳で子どもの心にすっと入ってきます。●読んでもらいながら絵を楽しむ作品。●5才くらいから。



■「ぼく、ひつじじゃなくてぶたなんだ」

ヒム・ラマース／文
ミルヤ・プラーフマン／絵
長山さき／訳

最後のページに〈作者のことば〉があり、〈どうか、あなた自身の心の声に耳をかたむけてみてください。自分らしい自分であることが、しあわせへのたった一つの道なのだから〉とあり、印象的。●牧場にヒツジとブタの群れがいます。あれれ、子ヒツジが1匹、ブタと一緒に泥の中で転がっています。ヒツジたちは変だと言いますが、子ヒツジは「ぼくは子ブたなんだ！」と叫びかえします。子ヒツジは、ヒツジやブタたちに笑われ、農家のおじさんも考え込んでしまいます。でも、子ブタは「まっしろなからだで くさをたべて あるきまわるなんて、ぼくらしくない」と思うのです。●現代的なLGBTのテーマを扱っていますが、見た目の違いや自分らしさって何だろう？を子ども自身が考えるきっかけになるかもしれない作品です。●5才くらいから小学生にも。



■「はらぺこサンタのクリスマス」

はらぺこめがね／作

クリスマスの前日、サンタクロースは子どもたちに届けるプレゼント

を袋に詰める作業で大あわて、腹ぺこのまま出発します。家々を訪れるサンタの目に映る山や湖、家の窓がおいしそうな食べ物に見えてしまいます。●作者の〈はらぺこめがね〉は2人組の絵本作家で、〈食べ物や料理〉をテーマにした作品をたくさん生み出しています。●この作品でも、サンタが勘違いしてしまう食べ物はどれもおいしそう。ポンポンとリズム良く読める文と絵の展開があざやかで、あっという間に最後まで楽しめます。最後のページのサンタはとても幸せそう、まんぷくサンタ！です。●3歳くらいから。●常呂図書館にある〈はらぺこめがねの〉作品は、「かける」「くだものさがしもの」「ごはん山」「チキンライスがいく」「にくのくに」「ふるふるフルーツ」「やきそばばんばん」。



■「ちいさなおうさま」

三浦太郎／作

色の変化とデザインの良さを楽しむ作品。

●小さな王さまは大きなお城に住み、大勢の家来がいて、大きなテーブルにはたくさんのごちそう、大きなお風呂、大きなベッド…落ち着けず、良く眠れません。あるとき、王さまは大きなお姫さまと結婚し、たくさんの子どもの恵まれます。●作者のたくみなところは、王さまの心の変化を色で表し、〈大きなモノ〉すべてが最後にはちょうどピッタリにさせてしまうこと。そして、キャラクターやモノの細部まできっちりデザインしたページ作り。読んでもらう子どもは、自然とセンスの良さを身につけるのでは…。●3才くらいから。





本との出会いを ボーイズ＆ガールズに

■「チイの花たば」

森絵都／作 たかおゆうこ／絵

チイのおばあちゃん
は花屋さん。お客
さんの話をじっくり聞
き、寄り添い、その人
にぴったりの花束を作
ります。チイはおばあ
ちゃんのような花屋さ
んになりたいとおばあちゃんに言うと、お
ばあちゃんから「じきに、花にためされる
日が来ることだろうね」と言われます。お
ばあちゃんもチイと同じ頃に花からテスト
を受けたことがあるのです。●チイは夢の
中で、花にまつわるお客さんの困りごとに出
会います…とても変わった3つの困りごと。
チイはどうやって解決するのかな？と思
いめぐらしながら読む楽しみがあります。
●未来の自分を思い浮かべながらどん
な試練が待っているのかを考えるきっかけ
になるかも。森絵都さんの文とたかおゆう
こさんの絵がピタリと合い、ステキさアッ
プ。●小学校低学年に。



じさんは火星人で、より良い火星になる
ために地球で687日過ごし、火星人と
ばれなければ地球人に正体を明かして火星
に帰してもらえるんだ…と。火星人はうそ
がつけなく、けんかもせず、まるまる人を
信じるので、争いやだまし合いがいっぱい
の地球で過ごすことは最高の修行…いとう
ひろしさんだから生み出せた発想です。●
70ページの物語の中で、火星人も地球人
も同じように暮らしながら決定的に違う価
値観を小学校低中学年の子どもが理解でき
る言葉で問いかけています。●ぼくとおじ
さんとの会話は、子どもたちにとってはと
ても刺激的で、読み進めて行くにつれ、自
分の頭で〈今とこれから〉を自然と考える
ようになれる。ふんだんに使われる作者
の絵もイメージをふくらませる役割を果た
しています。●最後のページにある、ぼく
が地球と火星をまたいでいる絵は印象的。

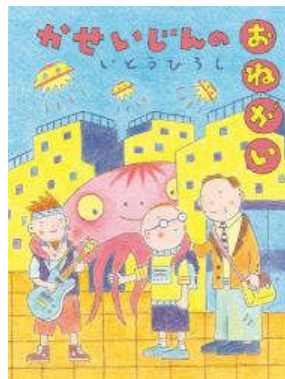
■「そらとうみとぐうちゃんと きみたちのぼうけん」

椎名誠／作 沢野ひとし／絵

■「かせいじんのねがい」

いとうひろし／作

いとうひろし
さん流の〈うそ
や争い、だましあい、
けんか〉がはびこり、
当たり前の世の中、
地球ってどうなんだ
ろう？を子どもの目
を通して伝えていま
す。●ぼくが友だちの家から帰る途中。駅
前の通りでちょっとくたびれたおじさんに
声をかけられ、あるお願いをされます。お



国語の教科書用に書
き下ろした物語を
中心に編集した4つの短
編集。物語に流れている
のは、想像することと体
験することの大切さ。世
界中を旅した作者の世界



観が色濃く反映しています。●作品の後半
に20ページほどの長い「シーナのきまぐ
れ自著解説」があり、なぜ4つの作品を書
いたのかを自身の体験を交えて書いていま
す。解説は子どもたちには少し難しいけれ
ど、おとなに手伝ってもらいながらお話と
一緒に楽しむとおもしろさが増します。●
4番目の「アイスプラネット」は、子ども

たちをびっくりさせることでしょう。世界は広く、驚くことがいっぱいあることを、物語の世界で知ることができます。●小学校低学年から高学年、中学生まで。どれかの作品を楽しめます。

■「イナバさんと雨ふりの町」

野見山響子／作

シリーズ2作目。不思議でユルユルの楽しい3つの連作物語。●ちょっとぼんやりしたウサギのイナバさんは、ひょんなことで違う世界に迷い込



んでしまいます。●1話では、スーパーマーケットのエレベータから子どもだけの隠れ家のような遊園地に…、第3話では福引きで当たった温泉旅行に行き、イナバさんの分身ができてしまい…。●おもしろいのは、違う世界に迷い込んでしまう〈きっかけ〉。また、食いしん坊のイナバさんらしく〈食べ物〉が迷い込んだり解決する役割を果たしています。そして、イナバさんが迷い込む場面に必ず現れる不思議なおじさんが味を出しています。●イラストレーターの作者が描く挿絵がイナバさんのキャラクターを表現。200ページ以上ながらすんなり読めます。●小学校中学年に。

■「みつばちと少年」

村上しいこ／作

人とコミュニケーションを取ることに不得手な雅也が、北海道駒ヶ岳のふもとで養蜂を営むおじさんの仕事を手伝い、家庭・家族に問題を抱えて



いる子どもたちの施設〈北の太陽〉で暮らし、大切な友だちができ、希望を手にする成長物語です。●人の気持ちを考えながら自分の考えを伝えることがうまくできない

雅也は、友だちができず教室で孤立しています。北の太陽にいる子どもたち5人は、おじさん曰く〈あたりまえに育ってない…家族がいない。いても一緒に暮らせない。家族から逃げてきた。そんな子どもたちばかり〉。●雅也は、子どもたちのリーダー・海鳴（かいなり）から〈わかってもらうためには、言葉にするしかない…ここではみんなが自由に発言できる…もし何か思っているなら話して〉と言葉をかけられ、いつも誰かを不快にしようと思っていた自分が認められたように感じ始めます。●この作品では、大事な場面で「みつばちマーヤの冒険」のフレーズが使われます。雅也と海鳴たちは、町の名物〈イカめしコンテスト〉に挑戦することで大きく変化を遂げます。この変化に「みつばちマーヤ」をうまく取り入れ、子どもたちの心の成長に結びつけています。自身の不得手なことに向き合うようになる雅也といろいろなことをガマンし続けてきた北の太陽の子どもたちが自信を持つようになっていく後半は読みごたえがあります。●中高生に。

■「万葉恋ばな 春夏秋冬」

みずのまい／作

万葉集に収められている恋の歌を幾通りにも楽しめる作品。●万葉集から恋の歌を20編取り上げ、最初に歌、次にその歌を題材にした作者のショート・ラブ・ストーリー、歌の読み、意味・解説・用語解説と続きます。



●万葉集をそのまま味わうこともできるし、万葉集を題材とした現代の恋物語を楽しむこともできる…とてもお得な作品です。●恋物語は中高生の学校生活など身近なことを描いているので親近感が湧き、万葉集の歌を覚える最良のテキストかも。もちろん、ショートストーリーの読みやすい恋物語だけの拾い読みもできます。●1300年前と現代とが〈変わらない恋心〉でつながります。●中高生からおとなにも。